

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和元年度病害虫発生予察特殊報第3号について

このことについて、下記のとおり発表したので送付します。なお、病害虫防除所ホームページ (www.jppn.ne.jp/kagoshima) にも掲載しています。



病害虫発生予察 特殊報第3号

令和元年10月18日

鹿児島県病害虫防除所

1 病害虫名 ツマジロクサヨトウ (チョウ目, ヤガ科), *Spodoptera frugiperda*

2 寄主植物名 サトウキビ

3 発生確認及び発生状況

2019年10月17日に西之表市のサトウキビほ場で、ヨトウ類幼虫による食害が確認され、同日、門司植物防疫所鹿児島支所に同定依頼した結果、ツマジロクサヨトウと確認された。

本種によるサトウキビでの発生確認は、沖縄県に次ぎ2例目である。本県では飼料用トウモロコシ、スイートコーンおよびソルガムですでに発生が確認されている。

本種は、南北アメリカ原産で、2016年にアフリカ大陸で発生が確認された後、2018年までにアフリカ中南部のほぼ全域に分布が拡大し、2018年にはインド、スリランカ、バングラディッシュ等の南アジア、2019年には中国でも発生が確認された。

4 形態及び生態等の特徴

(1) 分布

北米～南米、アフリカ (サハラ以南)、アジア (インド、中国、タイ、ミャンマー、台湾等)

(2) 寄主植物

アブラナ科 (カブ等)、イネ科 (トウモロコシ、イネ、サトウキビ等)、ウリ科 (キュウリ等)、キク科 (キク等)、ナス科 (トマト、ナス等)、ナデシコ科 (カーネーション)、ヒルガオ科 (サツマイモ等)、マメ科 (ダイズ等) などの広範囲な作物。

(3) 形態及び生態

ア 成虫は開張約37mm、雌雄で外観が大きく異なり、オスのみ前翅中央部に白斑を持つ (写真1)。終齢幼虫は体長約40mmで頭部の逆Y字および尾部の斑点が特徴である (写真2, 3)。卵は寄主植物に塊状に産み付けられ、メスの体毛で覆われる。

イ 本種は暖地に適応した種 (南北アメリカ大陸の熱帯～亜熱帯原産) であり、熱帯では年4～6世代発生する。南北アメリカでは毎年夏季に成虫が移動・分散するが、暖地を除く地域では越冬することはできない。

(4) 被害

ア 中米・ニカラグアの調査では、肥大型から成熟期のトウモロコシに55～100%で本種が加害した場合、収量が15～73%低下する報告がある。

イ 本虫は、幼虫が新葉の葉鞘部を食害する。摂食量が多く、食害部には糞が散在する (写真4, 5)

ウ 本県では、これまで出穂前の飼料用トウモロコシおよびソルガム、スイートコーンの茎葉と子実において食害が確認されている。

5 防除対策

(1) 現在のところ、西之表市のみで発生が確認されているが、多発すると被害が拡大する恐れがあることから、鹿児島県の他のサトウキビ生産地域においても、ほ場をよく見回り幼虫の早期発見・早期防除に努める。

(2) 発生ほ場においては、別紙に指定する薬剤の散布を行う。

(3) 本害虫によるサトウキビへの加害は、発芽～生育初期のほ場で多いと考えられるため、この時

期は特に注意する。

新植サトウキビの幼梢は、粒剤有効成分の浸透までに期間を要することから、本種発生時は、散布剤等による防除を行う。

(4) 幼虫の分散を防ぐため、収穫後は直ちに耕耘する。

6 参考文献等

(1) 農林水産省ホームページ，侵入を警戒する病害虫に関するファクトシート，

【病害虫の名称：ツマジロクサヨトウ】より

(2) 松村，大塚，吉松（2019）ツマジロクサヨトウの中国における分布拡大と日本への侵入警戒，植物防疫 73：434-438



写真1 ツマジロクサヨトウ成虫 左（♂） 右（♀）植物防疫所 HP より引用



写真2 幼虫（尾部）



写真3 幼虫（頭部）



写真4 サトウキビほ場での幼虫による食害



写真5 発生があったサトウキビほ場

ツマジロクサヨトウに対しては 以下の農薬を使用して防除を行ってください。

○サトウキビ

農薬の種類	使用方法	使用時期	散布液量	希釈倍数使用量	本剤の使用回数
BPMC・MEP乳剤	散布	収穫45日前まで	100～300L/10a	1000倍	4回以内
BPMC・MEP粉剤	散布	収穫45日前まで		3～4kg/10a	4回以内
BPMC乳剤	散布	収穫30日前まで	100～300L/10a	1000倍	4回以内
MEPマイクロカプセル剤	散布	収穫90日前まで	—	500～1000倍	4回以内
MEP乳剤	散布	収穫45日前まで	100～300L/10a	1000倍	4回以内
MEP粉剤	散布	収穫45日前まで		3～4kg/10a	4回以内
カルボスルファン粒剤	株元処理土壌混和	培土時		6～9kg/10a	1回
カルボスルファン粒剤	植溝処理土壌混和	植付時		6～9kg/10a	1回
クロチアニジン水和剤	散布	収穫30日前まで	100～300L/10a	2500倍	3回以内
クロチアニジン粒剤	植溝処理土壌混和	植付時		6kg/10a	1回
クロラントラニプロール・ジノテフラン水和剤	散布	収穫45日前まで	100～300L/10a	2000倍	3回以内
クロラントラニプロール水和剤	散布	収穫30日前まで	100～300L/10a	5000倍	3回以内
クロラントラニプロール粒剤	株元散布	生育期但し、最終培土まで		4～6kg/10a	1回
クロラントラニプロール粒剤	植溝土壌混和	植付時		4～6kg/10a	1回
フィプロニル粒剤	株元処理土壌混和	培土時		6kg/10a	1回
フィプロニル粒剤	植溝処理土壌混和	植付時		4～6kg/10a	1回
プロチオホス粉粒剤	株元処理土壌混和	生育期但し、収穫90日前まで		15kg/10a	2回以内
ベンフラカルブ粒剤	株元散布又は株元土壌混和	培土時		4～6kg/10a	1回
ベンフラカルブ粒剤	植溝土壌混和	植付時		6～9kg/10a	1回

上記農薬はツマジロクサヨトウに対して登録はありませんが、植物防疫法第29条第1項の規定による防除を行うために使用する農薬として、使用が可能です。

また、上記希釈倍率、使用方法、使用時期、散布量、回数を守ることで、出荷停止等、流通に支障が出ることもありません。